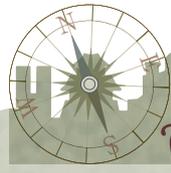


December
号外
2021

過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞

上町台地 今昔タイムズ



上町台地 今昔フォーラム

vol.16 Document



発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL) / 企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング
問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当:CEL弘本)
ホームページ <http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html> ※U-CoRo=ゆーこーろ (上町台地コミュニケーション・ルーム)

2021年3月発行の「上町台地 今昔タイムズ」vol.16の関連イベントとして、2021年10月11日(月)夜、オンラインLIVE配信で、同号が浮き彫りにした、町・村の形成や再生と深い関わりを持つ“相撲”の風景を入り口に、さまざまなバックグラウンドから地域・社会にアプローチするキーパーソンが知を持ち寄り語り合う、ダイアログ ナイトを開催しました。コロナ禍2年目の秋を迎え、予断を許さない状況が続くなか、足元に埋もれている歴史の実相を将来に向けて捉えなおすとともに、海外からのまなざしも得て、地域・社会の持続性やレジリエンスを支えるものは何なのか、新しい視点や鍵を探りだしていく契機となりました。

*プロジェクトの詳細は、ホームページ「大阪ガス CEL」[U-CoRo]で検索してご覧いただけます。



▲壁新聞
「上町台地 今昔タイムズ」第16号(1面)

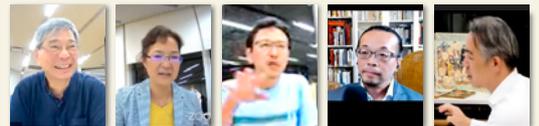
「上町台地 今昔タイムズ」*vol.16では、「聖と俗のあわいで安寧を願う上町台地相撲パノラマ」をテーマに、大阪のまちの歩みと深い縁で結ばれてきた“相撲”と上町台地の関係性に着目。近世から近代へ、戦災や災害から復興へ、時代の荒波をと乗り越え、まちの生命力を引き出してきた足跡を、地域のみならずの記憶を交えて浮き彫りにしました。



上町台地・今昔フォーラム VOL.16
2021年 秋の上町台地
ダイアログナイトを開催しました(オンラインLIVE配信)
とざい とうざい
東西東西!

上町台地から“相撲”と大阪のまちの深い縁を眺めれば、 これからの地域・社会を描く鍵が浮かび上がってくる!?

- 開催日時：2021年10月11日(月) 18:50～21:30頃
※配信トラブルのため予定時刻より20分遅れて開始
- 開催方法：オンラインLIVE配信 (Zoom画像をYou Tubeでライブ配信)
※大阪ガス実験集合住宅NEXT21 交流室をスタジオに
- 出演者：
 - キーンノートスピーカー：飯田直樹 (大阪歴史博物館 学芸員)
 - コメンテーター：高松平蔵 (ドイツ在住ジャーナリスト)
 - 別所秀高 (鴻池新田会 学芸員)
 - 池永寛明 (大阪ガス エネルギー・文化研究所 顧問) (敬称略・順不同)
- 進行役：弘本由香里 (大阪ガス エネルギー・文化研究所 特任研究員)



- プログラム：
 - プロローグ「上町台地 今昔タイムズ」vol.16のレビュー
 - キーンノートスピーチ「大阪のまちの形成と“相撲”の縁を紐解く」
 - ダイアログ(トークセッション)「都市・町・村の営みとともにあった“相撲”の風景は、何を物語っているのかーこれからの地域・社会を形づくる鍵を探る」
- 主催：大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL) 企画：U-CoRoプロジェクト・ワーキング

<ダイアログナイト・プロローグ>

大阪の原点・上町台地から、相撲と大阪のまちの関わりを眺望

構成：大阪ガス CEL/U-CoRo プロジェクト・ワーキング (CEL 弘本由香里、B-train 橋本護)



「難波鑑」の挿図と高津宮 ①



難波新地の勧進相撲 ②



川崎巨泉が描いた角力人形 (大阪府立中之島図書館「人魚洞文庫データベース」より)

角力人形の店は下寺町、上町台地への登り口(愛染坂の下)あたりにあったという ⑤



新世界の大阪国技館 ③

地域の営みと相撲の風景

都市や町・村の営みとともにあった相撲の風景というのは、一体何を物語っているのでしょうか。今日のフォーラムでは、コロナ禍後に向けて、これからの地域社会に求められる鍵を探り出し、歴史と現在未来をつなぐ視野を開くことができると考えています。

まずは、「上町台地 今昔タイムズ」第16号のエッセンスを紹介します。第1面では、上町台地から、相撲と大阪のまちの関わりを眺望しています。

相撲は、本来大地を踏み鎮め邪気を払い豊穡を祈る神事であるとともに、人々の楽しみ、娯楽の対象でもありました。それが近世から現代に至るまで、長きにわたり人々の関係性づくりや社会的な基盤の形成にも深く関わってきたのです。

江戸時代前期の書『難波鑑』に描かれた九月十日「高津祭」相撲の挿図には、本殿前で相撲に興じる様子が描かれています(①)。近世では、相撲は土地を開きその繁栄を祈るための神事でもありましたが、そこには、人々を惹きつけるイベントとしての熱狂もありました。『撰津名所図会』には、



角力人形の店 ④



江戸時代の大坂の相撲関連地図 ③

難波新地での大規模な相撲興行の図があります(②)。

大阪で初めて公に許された勧進興行は元禄の頃に堀江新地の振興策として開かれたものと言われています。大規模な相撲興行をする渡世(プロ)の相撲集団が、江戸時代は大坂のまちや近郊地域に生まれていたそうです(③)。

角力人形がつなぐもの

1903(明治36)年に大阪で開催された第五回内国勧業博覧会、この会場跡地に誕生した「新世界」に1919(大正8)年、大阪相撲の殿堂として大阪国技館が建てられました。

この頃、大阪と相撲の文化を表象する「大阪角力人形」という玩具があり、それを大正から昭和に活躍した絵師で画家の川崎巨泉(人魚洞)が「おもちゃ絵」としてたくさん描いています(④)。

そうした人形のうちのひとつの覚書には、第五回内国勧業博覧会の頃に下寺町の遊行寺門前で売られていたと書かれています。

これは、奇しくも角力人形が上町台地の寺町と博覧会後の新世界とを結ぶ役割を果たしているようにも見えます。聖と俗の隣り合う関係性があったわけです(⑤)。

また、川崎巨泉が描いたおもちゃ絵には、「大阪角力人形」のほ

か「大阪角力起上り」や「大阪角力毛人形」といった、相撲関連のものが数多くあります。明治から昭和初期の子どもの遊びや生活文化の中での相撲の浸透ぶりを物語っています。

蓄積されてきた相撲文化

第2面では、戦災や災害から復興へ、時代の荒波を乗り越えてきた大阪のまちと文化の蓄積を上町台地と近隣地域に探っています。

1953(昭和28)年から、大阪府立体育館での大相撲本場所の開催が始まりました。

その後、昭和30年代は、大阪場所の早春の季節には寺町界隈のお寺などにたくさんの相撲部屋の宿舎が設けられ、地域は力士であふれていたそうです。相撲雑誌でも、寺町で繰り広げられるお相撲さんの日常風景が毎年紹介されていました(⑥)。

「相撲」1961年3、4月号、ベースボールマガジン社



昭和30年代の相撲雑誌より ⑥

寺町とタニマチの伝統

寺町界隈は江戸時代から複数の相撲部屋があった地域です。大阪での相撲興行の際には、お寺が力士に宿舎を提供してきた伝統もありました。現代の川柳ですが、「大阪はお寺の中で四股を踏み」という句にも表現されています。

また1889(明治22)年に谷町六丁目に病院を開業した薄壽一



四天王寺 伽藍復興の勸進相撲 ⑦



高津宮での横綱・朝潮の人数入り式 ⑧



毎年春場所には高砂部屋宿舎になる久成寺 ⑨

んがタニマチという言葉のモデルになったとも言われます。病院内に土俵を設けるほどの相撲好きで、貧乏な力士は無償で診療したということが伝えられています。

大阪の戦後復興と相撲

大阪の戦後復興の象徴ともいえる出来事のひとつが四天王寺の伽藍再建でした。1961(昭和36)年秋、新横綱の柏戸と大鵬を招いての勸進相撲は、相撲全般を後援する「東西会」を結成した中村広三さんたちの尽力で実現したそうです(⑦)。

中村広三さんは、現在緑橋にある中村クリニックの中村正廣医師の祖父にあたる方でした。大阪での大相撲本場所の開催をはじめ、四天王寺伽藍復興では、東西会として金剛力士像を寄進。自宅横には土俵をつくり、自身の鍛錬とともに、大阪場所の相撲部屋の宿舎にも提供されていたそうです。

もうひとつ、戦後復興の象徴と言えるのが、1961(昭和36)年に高津宮本殿の再建を祝う横綱朝潮の人数入り式(ずいりしき)が行なわれていることです。大地を踏み鎮めて邪気を払い豊穡を祈る象徴としての相撲の歴史的存在が引き継がれている事例だと言えます(⑧)。

また、高津宮本殿には1969(昭和44)年大阪場所の優勝力士の琴桜をはじめとして北の富士、大鵬、柏戸、豊山、玉乃島の手形とサインも並べられています。

地域に根を張る相撲文化

地域に根を張る相撲文化の象徴として、東成区の東小橋公園の土俵があります。大阪場所近く

に宿舎を設ける現在の伊勢ヶ濱部屋(土俵が出来た当時は安治川部屋)と地域の青少年団体が共同でつくり、大阪市に寄贈したものだそうです。今でも大阪場所の時期、お相撲さんたちがここで稽古をしています。

また、真田山の三光神社境内には、相撲の始祖とされる野見宿禰の神社があります。これは幕末～明治期に天満から難波新地を経てこの地に鎮座したもの。また、三光神社本殿前には戦災を受けた片柱の鳥居があり、そこには、陣幕、竹縄、藤島、美保閑、朝日山など大阪相撲関連の名が並んでいます。

実は上町台地は江戸時代に編まれた百科事典、『和漢三才図会』にゆかりの地。そこには、相撲好きの河童の話や草花相撲の項目もあります。相撲がいかに生活文化に浸透していたかということが分かります。

それから、中寺町の久成寺は、これまで半世紀以上の長きにわたり、大阪場所の高砂部屋宿舎としての歴史を守られています(⑨)。

地域社会と相撲の深いつながり

上町台地とその周辺の数々の力士墓を回ってみると地域社会とのつながりに改めて気づかされます。

四天王寺には有名な力士の墓が数多くあり(⑩)、寺町の遊行寺や一心寺にも有名な力士墓があります。またかつて北の湖部屋の大坂宿舎だった生野の成恩寺には三保ヶ関代々のお墓が並んでいます。

また、大相撲だけでなく、昔は各



地に相撲集団があって、実は都市の興行も支えていました。そして地域と相撲集団の結びつきの強さを今に伝えているのが、古い墓地のあちこちにある、村相撲のお相撲さんの頭取たちの墓です。

例えば、生野区の田島墓地、「朝嵐」の名がある墓石があります。この墓をはじめとして、生野区の吉村健一さんに周辺の力士墓にご案内いただきました。吉村さんの会社の近くにある墓地の横の駐車場には吉村さんが子どもの頃には土俵があったそうです。「上町台地 今昔タイムズ」第16号の特集は、吉村さんのお話から、地域の営みと関係する相撲文化の深い意味に気づかされたことが、ひとつのきっかけにもなりました(⑪)。



四天王寺の墓地にある大阪相撲の力士墓 ⑩



吉村健一さん(上)と田島墓地の「朝嵐」墓 ⑪

<ダイアログナイト>

都市・町・村の営みとともにあった“相撲”の風景は、何を物語っているのか

—これからの地域・社会を形づくる鍵を探る

出演者：飯田直樹 (大阪歴史博物館 学芸員)
 別所秀高 (鴻池新田会 学芸員)
 高松平蔵 (ドイツ在住ジャーナリスト)
 池永寛明 (大阪ガス CEL 顧問)
 進行役：弘本由香里 (大阪ガス CEL 特任研究員)



<キーノートスピーチ>

●大阪のまちの形成と“相撲”の縁を紐解く

飯田直樹 (大阪歴史博物館 学芸員)

いいた・なおき

相撲をはじめ、米騒動や町の水帳など、歴史的資料を通して社会の構造を探る研究及び企画展などを展開。



これからの地域・社会を描くための三つのキーワード

今日の私の話では、以下の三つのキーワードで、大阪のまちの形成の歴史と相撲との関係を振り返ります。

相撲の歴史とはやはずれるのですが、第一のキーワードは「共同体」です。具体的には、江戸時代の町人の身分共同体である町(ちょう)に注目します。町という身分共同体は、町人身分である家持(いえもち)を構成員とする共同体のことでした。

第二は「所有」。具体的には、土地の所有のあり方に注目します。さきほど、町人身分を家持と言いましたが、家持とは、土地、当時の言葉では家屋敷の所有者という意味になります。

最後は「相互扶助」。具体的には町が持っていた困窮者への施しや勧進への対応、捨て子の養育などの機能に注目します。

この三つのキーワードは、これからの地域・社会を描く際には、必ず検討しなければならない問題であると私は考えています。

長い歴史をもつ大阪相撲

まず、最初に大阪相撲について説明します。江戸時代の三都には、江戸相撲(後

の東京相撲)、大阪相撲、京都相撲という相撲を職業とするプロの相撲集団が存在しており、三都で開催される大相撲興行の一翼を担っていました。

このうち、東京相撲と大阪相撲が1927(昭和2)年に合併し、現在の相撲協会の前身が成立します。したがって、大阪相撲は相撲協会の源流の一つということになります。現在の年寄名跡にも、大阪相撲に由来するものがあり、三保ヶ関、時津風、竹縄、陣幕などがそうです。

江戸時代の三都では、年に四回大相撲が開催されましたが、これが現在の年に六場所の大相撲へと発展していきます。

堀江での大相撲興行と相撲集団の成立

江戸時代、大坂での大相撲は、当初は堀江新地で行われ、後に難波新地でも開催されるようになります。

堀江での大相撲興行のきっかけは、堀江新地の開発でした。堀江は、長堀、西横堀、道頓堀、木津川に囲まれた地域。17世紀には農村地帯で、まだ都市化していませんでした。

この地域の開発は、1698(元禄11)年から、幕府の主導で進められますが、なかなか開発が進まないなか、振興策として同地での相撲興行が1702(元禄15)年に免許されます。

こうして、堀江での大相撲が毎年開催されるようになり、江戸時代の大坂で相撲集団が成立していったと考えられます。

現在の堀江には、いくつか相撲に関する史跡や記念碑が残っています。南堀江公園内にある「勧進相撲興行の地」という碑もそのひとつです。

また、堀江に住んでいた文人として、木村兼葎堂という人物がいます。彼は、北堀江五丁目の年寄をつとめていた町人

堀江の開発と相撲

堀江・長堀、西横堀、道頓堀、木津川に囲まれた地域
 1698年(元禄11)から幕府が開発
 繁栄策としての様々な特権付与
 1702年(元禄15)に勧進相撲免許
 大坂三郷町絵図 1655年

堀江の開発と相撲

南堀江公園内の「勧進相撲興行の地」碑
 木村兼葎堂(けんかどう)(1736~1802)
 堀江の町人、酒造業者北堀江5丁目の年寄博物学者、頭取竹縄と親しい

で、酒造業を営む家に生まれました。全国の文人・知識人と交流したことで知られる兼葎堂は、相撲関係者とも親しく交わり、当時の竹縄親方と茶屋遊びをしていたことが日記で確認できます。

公権力の関与と新地の発展

堀江での相撲興行の様子を描いた珍しい絵があります。やや大げさに手を振って土俵入りをする力士たちが描かれています。この力士たちの動きを、歌舞伎役者がする六方を踏む動作に似ていると指摘する人もいます。当時の相撲興行が、芝居や芸能的な性格が強かったことを示すものかもしれません。

さて、江戸時代の新地の開発は堀江だけで行われたわけではありません。堀江の後には、曾根崎新地、難波新地などの開発が行われています。難波新地でも相撲興行が行われるようになっていきましたが、新地開発の先駆けとなったのが、有名な道頓堀の開発です。

道頓堀の開発は、江戸時代の初め頃1612(慶長17)年から始まります。その約20年後には、開発されたにも関わらず町人が定着せず、開発された土地の3分の1が空き地となっていたことがわかっています。そのため、1640(寛永17)年から再開がはじまり、その一環として、当時の有力町人であった安井家が芝居小屋を誘致することを幕府は認めることになります。この誘致が、後に道頓堀が劇場街となるきっかけとなったのです。

道頓堀と堀江新地という二つの開発事例は、道頓堀では、芝居小屋誘致の許可、堀江新地では、相撲興行の免許ということで、公権力がてこ入れをしないと、江戸時代ではなかなか都市開発が進行

堀江での相撲の様子

古今相撲大全1763年 相撲博物館蔵

しないことを示しています。簡単に言うと、町人が都市で土地を所有して、定着することの難しさを示しています。

江戸時代の共同体としての町

次に、江戸時代に町が持っていた「相互扶助」の機能に注目します。まず町人が都市に定住することの困難性に対して、共同体としての町がとった対策、家屋敷取得規制というものを確認していきます。

江戸時代の町は、構成員である町人たちが相談して独自のルール(町法)を決め、それに基づいて町運営がなされていましたが、多くの町では、町人の財産や生業を守るために家屋敷の自由な売買を規制するための規則を設けていました。

例えば、菊屋町という町では、式目と呼ばれる独自のルールを定め、その中で町内の商売のさまたげになる者には家屋敷を売ることを禁止していました。

また、金沢町の式目では、次のように定められていました。

町内で家屋敷が売りに出された時は、その買主については町内でよく調べて、町人同士で相談して決めること。

町による家屋敷取得規制の実例

金沢町町内式目定帳 1808年 大阪府公文書館蔵

金沢町では、町の承認を得なければ家屋敷の売買はできなかったわけです。土地の売買という経済活動が自由にできる現在と違って、町という共同体が経済活動を規制する、日本の江戸時代はそういう時代であったということです。

相撲集団と仲仕の関係性とは

1892(明治25)年の大阪相撲の興行風景を描いた錦絵があります。2階の観客席上部に据えられている幟に記された文字に着目すると、右側には、「市場」、「うつば」と記された幟が、左側には、「ごこ



大阪大相撲之図 1892年

ば」、「堂嶋浜」と記された幟が、それぞれ描かれています。

これらは、どういう場所であったかと言うと、市場があった地域です。雑魚場(ざごば)は魚市場、鞆(うつば)は干鰯市場、堂嶋浜は米市場。いずれの市場も堀川沿岸にあったことが注目されます。

つまり、大阪相撲という相撲集団は、市場社会と密接な関係を持っていたことが、この錦絵からうかがえます。

そうした市場社会のなかで、特に仲仕(なかし)と呼ばれる人々と相撲集団とは関係が深かったと考えられています。

仲仕とは荷揚げ作業に従事する人たちのこと。西日本の大名が領内でとれた米の販売のために中之島に設けた蔵屋敷には、小舟で運ばれてきた米俵を運び入れる仲仕たちが大勢いました。

江戸時代の大坂は堀川沿岸に多くの市場を発達させましたが、そうした市場社会では、荷揚げ作業に従事する仲仕は不可欠な存在でした。

仲仕と相撲との関係については、福澤諭吉の『福翁自伝』に次のような記述があります。

江戸に遊学しようと、長崎から生まれ故郷である大坂の中津藩蔵屋敷に立ち寄った福澤は、久しぶりに自分を育ててくれた人びとに会います。その中には蔵屋敷で働いていた仲仕の妻や、武八という奉公人がいました。武八が言うには、幼い福澤は武八に抱かれて、蔵屋敷の近くにあった湊部屋という相撲部屋に毎日稽古見物に行っていたそうです。

蔵屋敷で暮らしていた下級武士の息子の福澤を介して、仲仕の世界と相撲の世界がつながっていたことがなんとなくうかがえる記述ではないでしょうか。福

蔵屋敷で働く仲仕(なかし)



「摂津名所図会」より

澤が生まれた中津藩蔵屋敷は玉江橋の北詰めにあり、その近くに湊の相撲部屋がありました。

大阪相撲では、力士の親方のことを頭取と呼びます。銀行みたいですが、その頭取のうち、初代の朝日山四郎右衛門という人物は、侠客であり、もと仲仕でした。

このように、大阪相撲には仲仕出身の力士や頭取が数多く確認されています。また、大阪相撲には鞆部屋という相撲部屋がありました、この部屋は鞆の永代浜にありました。

永代浜は、小舟で運ばれてくる商品を仲仕が荷揚げ作業をする現場でした。つまり、相撲部屋が仲仕が働く作業現場にあったことになります。

江戸時代、商品の荷揚げ作業に従事する仲仕のような不熟連労働者は、日用と呼ばれる存在でした。日用とは現在の日雇労働者のような存在です。この日用層には、単身の労働者たちがリーダーである部屋頭と擬制的な親分子分関係を結んで、部屋単位で労働・生活をするという特徴がありました。

武家奉公人で言えば中間部屋、近代の炭鉱労働者で言えばタコ部屋といったものがそのような部屋の具体例です。

相撲部屋も、親方と弟子が親子関係を結んで、部屋で一緒に生活するという点で、日用層の部屋と共通しています。

鞆部屋は相撲部屋でしたが、仲仕が働く永代浜にあったことから、仲仕たちも生活する部屋だったのかもしれない。

相撲興行の勧進とねだり行為

さて、日用層には「ねだり」という特有の

行動があったことが知られています。仲仕や相撲集団にも同様の行為があったことが確認されています。

たとえば、相撲興行や祭礼の際に、仲仕や相撲集団が鞆の干鰯屋仲間という商人たちの集団に合力(ごうりき)、つまり金品を要請したことが知られます。しかも、それを鞆を構成する三つの町が支持していたことが知られています。



江戸時代の相撲興行、特に大相撲は、「勧進」を名目とする勧進相撲として開催されましたが、この勧進相撲の「勧進」とは、本来、宗教的な喜捨を募る行為のことで、転じて乞食・物乞いという意味にもなりました。

したがって、勧進相撲も広い意味では「ねだり行為」の一種であったとも言えます。それでは、町がこうした相撲集団のねだり、合力を支持したのはなぜかという、町にはそうした合力に応える相互扶助機能があったからだとは私は考えます。

共同体の再建は相互扶助機能の再生から

江戸時代の町は、飢饉や米価高騰時には貧民に施行をしたり、乞食など勧進者に定期的に施しをしていたことが判明しています。

また、ある町で捨て子が発見された場合、その捨て子は発見された町が養育しなければなりません。つまり、町は捨て子養育機能も持っていたのです。

こうした機能を持った町が、相撲集団の合力要請を支持するのは自然なことだったのではないのでしょうか。

今、「共同体」という考え方が改めて注目されています。人類が際限のない経済活動を進めてきた結果、温暖化・気候変動が起こり、現在は、新型コロナウイルスによってパンデミックが発生し、地球は人類が生活できない星へと変貌しつつあることはご承知のとおりです。

昨年のベストセラーの『人新世の資本論』の著者、斎藤幸平さんのように、これまでの経済活動や生活様式を人類が根本的に改めなければならない時期に来

ていると主張する識者が増えています。それはおそらく、共同体には際限のない経済活動を規制する力があるからでしょう。町共同体も家屋敷取得規制、現代風と言えば不動産売買という経済活動を規制し、共同体を持続させていく力を持っていました。

明治以降現在まで続く近代とは、こうした共同体が解体されてきた過程であると言えます。現代に生きる我々の課題は、こうした意味での近代化をやめて、現在にふさわしい形で共同体を「再建」ということにあるのではないのでしょうか。

最後に、町という共同体が捨て子養育機能を持っていたことを紹介します。道修町二丁目、三丁目で発見された捨て子を一覧にして表にまとめています。

表 道修町三丁目文書中の捨て子一覧(部分)

発見年月日	捨て子の性別(年齢)	発見場所(発見日・発見者)	発見場所	養育(養育先)
文政7年(1824) 2月28日 暮前時	男(0)	(前年7月誕生、2月死亡)	道修町三丁目 鳥飼屋助徳屋軒下	東成郡大今里村(現東成区) 百枝六兵衛
文政8年(1825) 1月4日 夜	わき・女(0)	?	道修町三丁目 中橋屋助徳屋軒下 門前小路出口	東成郡大今里村(現東成区) 百枝屋右衛門
文政13年(1830) 4月26日 暮六ツ時前	男(0)	—	道修町三丁目 鳥飼屋助徳屋軒下	—
天保4年(1833) 3月27日 暮六ツ時前	男(0)	(3/3誕生、翌日死亡)	道修町三丁目 鳥飼屋助徳屋軒下	川辺郡新屋敷村(現東成区) 百枝屋右衛門 近江屋助徳屋軒下
天保9年(1838) 1月22日 暮前時	わめ・女(1)	(前年12月誕生、死亡)	道修町三丁目 鳥飼屋助徳屋軒下	東成郡大今里村(現東成区) 百枝屋右衛門
嘉永3年(1850) 10月4日 暮六ツ時前	男(1)	(5月誕生、9/3死亡)	道修町三丁目 近江屋助徳屋軒下	東成郡大今里村(現東成区) 百枝屋右衛門
嘉永3年(1850) 10月25日 暮六ツ時前	すへ・女(0)	(4月誕生、10月中旬死亡)	道修町三丁目 近江屋助徳屋軒下	東成郡大今里村(現東成区) 百枝屋右衛門
嘉永4年(1851) 1月18日 暮六ツ時前	男(0)	—	道修町三丁目 近江屋助徳屋軒下	—
嘉永4年(1851) 2月25日 暮六ツ時前	男(1)	(前年7月誕生、2月死亡)	道修町三丁目 水戸屋小作	豊島郡牛立村(現豊中市) 百枝屋右衛門
嘉永4年(1851) 3月18日 暮六ツ時前	男(1)	(前年12月誕生、3月死亡)	道修町三丁目 鳥飼屋助徳屋軒下	東成郡大今里村(現東成区) 百枝屋右衛門
嘉永4年(1851) 4月29日 暮六ツ時前	男(0)	?	道修町三丁目 近江屋助徳屋軒下	東成郡大今里村(現東成区) 百枝屋右衛門
嘉永4年(1851)	道修町三丁目	豊島郡牛立村(現豊中市) 百枝屋右衛門

捨て子養育を担った町は、捨て子を育ててくれる適当な百姓夫婦を口入屋(仲介業者)を通して探しました。町が養育先に選んだ百姓夫婦はいずれも捨て子発見の直前に我が子を亡くしており、しかも捨て子の性別とその亡くなった子どもの性別が一致していました。例えば、捨て子が男の子でしたら、百姓夫婦が亡くした子も男の子でした。この性別の一致の背景には、捨て子を我が子の生まれ変わりとして育てたいという百姓夫婦の思いがあったのだと考えます。

町はそうした夫婦の希望を理解し、応えたということになります。共同体にはこうした力、相互扶助の力がありました。共同体を「再建」ということは、こうした相互扶助を「再生」していくという意味があるのだということを最後に確認しておきたいと思ひます。



<トピックス>

● 村相撲にみえる擬制血縁とその崩壊

別所秀高 (鴻池新田会所 学芸員)
べっしょ・ひでたか

鴻池新田会所での2006(平成18)年秋の特別展「村相撲の風景」を企画。地域での事前の聞き取り調査などを実施。

枚岡神社での村相撲の風景

「河内名所図会」より



きっかけは展覧会ための調査

江戸時代の『河内名所図会』には枚岡神社で行われていた村相撲の挿図があります。当時女性や子どもの相撲観戦を禁止するお触れが度々が出ていたのですが、よく見ると女性や子どもが大勢観戦しています。大人気だったわけです。

以前に、私は東大阪市の鴻池新田会所で、かつて盛んだった村相撲に関する展覧会を企画しましたが、その準備のために地域の古老などに聞き取り取材を実施しました。

その過程で、昔の村相撲を実際は何と呼んでいたのかを尋ねましたが、素人相撲、夜相撲などとも言ったそうです。

今日は、主に村相撲に見える「擬制血縁」とその崩壊についてお話しします。擬制血縁とは、実の血縁ではない親子親族関係のことですが、見方によっては、地主と小作人、大家と店子、店主と奉公人というも擬制血縁です。ある意味で親の権威によって子を支配している、逆に子は親に対する絶対服従、そういう力関係があるようにも見えます。

聞き取りのなかでわかってきたことでは、(取材した古老の)親の世代まで、血縁関係はないけれど同姓の「主屋(おも

や)」と呼ばれる家があったそうです。その家は近隣の冠婚葬祭を取り仕切るのが常で、自分の父親が主屋で祝言をあげたし、お葬式もその家で仕切ったとの証言もありました。

これは、おそらく明治になった時に、地

域の人たちが同じ苗字を名乗るといふうにして生じたことのように見えますが、これも擬制血縁の世界でしょう。

芸能界などでも、これと一緒に、擬制血縁のような感覚で芸名がつけられることが多いわけです。それは相撲の世界でもしかり。また侠客の世界でも親分が組織の看板を背負い、杯を交わして親子とか兄弟分になる。擬制血縁というのはそういう用語で呼んでいます。

村相撲の頭取の襲名披露興行

鴻池新田会所の朝日社絵馬堂には明治期の相撲番付が残されています。この番付をよく見るとプロの力士の名と近所の村の人の名前が一緒に載っています。



鴻池新田会所・朝日社絵馬堂

不思議だなと思ひ、きいてみると、昔この



辺でやっていた村相撲のものだということでした。

1974(昭和49)年、東大阪市内六万寺というところで行われた「弓ヶ浜」頭取の襲名披露興行では、4本柱を立てて本式の相撲をやっています。頭取が代替わりをする時に先代を送り出すための興行。こうした襲名披露興行のあがり(売り上げ)で、次代の頭取が先代にいろいろな贈り物をするわけです。



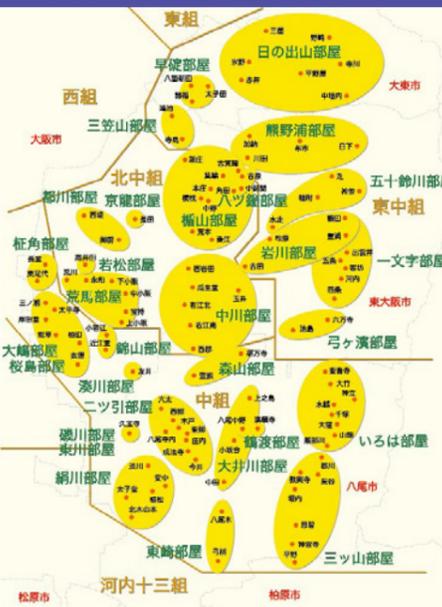
弓ヶ浜襲名披露興行 1974(昭和49)年 東大阪市内六万寺

そのひとつが墓の棹石で、名前が彫ってある墓石を先代に贈る習慣がありました。この興行の時もプロの興行師や大阪場所を終えた力士もいましたし、もちろん地元の村相撲の力士も参加していました。

近所の村墓に行くと、「弓ヶ浜」と書いている墓石がたくさんあります。何代も経つてくると、子孫が混乱するわけです。うちの名前は「弓ヶ浜」やったのか?って、わからなくなっている(笑)。ご先祖が昔、相撲をやっていたからでしょうと説明して、はじめて納得する方もいらっしゃいました。

こうした村相撲の頭取に、引退の際に後継者が棹石を贈るのですが、自家に墓がある人は自分の家の墓に新しい竿石を置くわけです。あるいは死ぬまで軒先に飾って、亡くなった時点で台座を注文する。だからお墓をよく見ると棹石と下の石材が全く違うことが多い。

中河内地域の相撲部屋の分布



大坂相撲協会設立とほぼ同時に「中組(相撲協会)も設立ただし、村相撲部屋は江戸時代から存在した

地域の相撲部屋が中心となり「夜相撲」を行った

のちに「中組」「東中組」「北中組」に分かれる

「中組」から大坂相撲へ力士を送り込むことがあった

「中組」は大坂相撲を招聘して地元で興行を行った

隆盛だった村相撲と相撲団体

素人相撲の部屋は河内に20から30ありました。相撲の部屋はそれ以前の江戸時代からありましたが、大阪相撲協会とほぼ同時に、河内では中組と呼ばれる相撲協会が設立されています。

地域の相撲部屋が中心となって、この地域では相撲が盛んに行われました。また、大阪相撲に力士を送り込むこともありましたが、逆に中組は大阪相撲を招聘して地元で興行も実施しています。

聞き取りの過程で、こうした縄張りなどが明らかになってきました。また、村相撲の期間は夏まつりに合わせて1週間ほどだったそうです。その間に子どもから大人まで相撲をとるわけです。明るいうちは子ども、夜になってきたら大人という感じで、よその村からも力自慢がやって来る。子どもは5番抜きしたら、1銭玉のつかみ取り。ただしその1銭玉はテーブルに広



京龍襲名披露興業 1956 (昭和31)年 東大阪市長田

げているので、なかなかとれない(笑)。

大人のは御幣の先に金一封が付いていて、5番抜きしたらもらえる。聞き取りでは、金額は多い時には5万円ぐらい、今なら20~30万円ほどでしょうか。

聞き取りから見えてきたことですが、祭りを取り仕切っているのは、青年団と消防団で、その消防団が消防ホースを夏祭りの度に

切って、まわし用として配っていたそうです。だから消防団イコール村相撲。つまり、村相撲の集団も青年団も消防団も、その構成員はほとんど同じだったということが見えてきました。

相撲の組織と村の共同体

1956 (昭和31)年の東大阪市長田というところの襲名興行では、頭取が審判をしている写真が残されています。現在と異なり、四本柱の前に審判が座っています。

同地では、板番付や化粧まわし、のぼりなどが綺麗に残されています。化粧まわしには、宮城山後援会と書かれています。大阪相撲の宮城山福松のことで、大阪相撲と東京相撲が合併して大日本相撲協会ができた時に大阪相撲から唯一横綱として移籍できたのがこの宮城山です。なかなかの散財家で、こういう化粧回しを後援会からもらっては、すぐに流していたという。その質流れ品をどこかで買って来たのではないかと

八尾市の弓削でも1971 (昭和46)年頃に襲名披露が行われています。この地域には、市議員で、元は立浪部屋力士だった人がいましたが、怪我で早くに引退された方なので、村相撲では抜群に強かったそうです。その人の話では、よその村に夜相撲に



東大阪市長田・高林家所蔵



東崎襲名披露興行 1971 (昭和46)年ごろ 八尾市弓削

行ったら、八百長を申し込んでくる人が多くて、わざと負けてやるわけです。花をもたせた相手にこれぐらいよこせと言ったら、取り分で喧嘩になるのこともあったそうです(笑)。

相撲興行などのあがりやで、前の頭取に贈り物をするだけでなく、いろんな石造物を地域の神社に寄進したりもしています。東大阪市の御厨天神社にある石碑の寄進者は都川部屋の前相撲取りたち。

珍しいのは、八尾市の太子堂墓地にある軍配の絵が掘ってある墓石。木村伊八の名があります。村相撲の行司の墓ですが、凝灰岩でできているので明治以前のものようです。行司の世界でも擬制血縁というのがあったように思われます。

都市化の進展と共同体の衰退

最後になぜこうした関係性が衰退していったのかについてお話しします。

共同体組織については、社会的な背景で言うと、大正・昭和時代の初期に農村社会から都市社会に変わっていったことが大きかったと言えそうです。特に都市近郊地域はその傾向が顕著です。

そしてもうひとつ。こうした社会変化に対して個人はどう対応していったのかです。共同体組織の中に組み込まれていた個人というのは、それまでは百姓で、たまに賃労働しているというような、主

に自営の人でした。それが、やがて社会経済組織に組み込まれていく。つまり賃労働者、サラリーマンになったということでした。これによって村への帰属意識がだんだんと薄れていったようです。要するに、ルーラル (田舎) がアーバン (都市) 化していったというふうには感じています。

最後に、先ほど弘本さんのお話に出てきましたが「東西会」について。調査の過

程で昔の名簿を目にする機会がありました。そこには村相撲に関わっていた頭取の方の名がたくさん載っていました。そういう方が後に、大相撲を応援する「東西会」の会員になられたということです。

あまり具体的な資料の証拠なしに結論づける話をさせていただけましたけれど、キーワードとしてはルーラルのアーバン化。それに合わせて、村相撲、そして共同体が衰退していったということで話

を終わらせていただきます。



弘本 別所さんのお話から思い出したのは、高松平蔵さんが以前から、日本は都市化はしたけれど都市社会化というものができなかったんじゃないかとよくおっしゃっていたことです。近代の日本社会がなぜそこを上手く形成していけなかったのか、それにつながるようなお話だなと思ってお聞かせいただきました。

<トピクトーク>

● 社会に根差す方法論としての“相撲”文化の本質



池永寛明 (大阪ガス エネルギー・文化研究所 顧問)

いけなが・ひろあき

都市の「本質」を探り、新しい日本社会のあり方を実践する、ルネッセ=再起動の活動を積極的に展開。

モノ・コトの「本質」とは何か

過去に生まれたモノやコトの中には現代にまで残っているモノ・コトがあります。過去から現代に至るまで、変えるタイミングはいくらでもあったのに、そうならなかったモノ・コトがあります。それこそが本質です。それは、「本当の質がある」ということ。昔からずっとこうだったというモノ・コトに「本質」があります。

例えば、その寺院がなぜここにあるのか、あり続けるのか、時の流れに寄り添うと、何が「本質」かが見えてきます。

大阪国技館はなくなったが、土俵上、土俵下、土俵周りにいる人々の想いは変わらない。そこに「本質」があると思います。

土俵の〇は日本社会の“本質”

柔道も剣道も□(シカク)なのに土俵

柔道も剣道も□(シカク)なのに土俵は〇(マル)

〇(マル)こそ、日本社会の基本構造。「和」=輪。そこに「本質」がある

は〇(マル)。この〇(マル)こそ、日本社会の基本構造。「〇」=輪=和。そこに「本質」があります。

モンゴルから来たひとりの少年が土俵で稽古をしていました。どの相撲部屋からも声がかからなかった少年には、そのままモンゴルに戻す航空チケットも用意されていました。その彼を救ったのが、大阪のある会社の社長でした。平成の大横綱、白鵬を生んだ都市は、「大阪」でした。

「大阪」って何だろう?

世間の大阪の印象は、声が大い、治安が悪い、品がない、がめつい、行儀が悪い、豹柄・パンチパーマのおばちゃん、お笑い、昼間から酒を呑んでいるおっちゃん、プラットフォームで並ばない、吉本、阪神タイガースなどなど。実は、これらは1960年代から大阪のイメージとして塗り替えられてきたものです。

その大阪が近年、「世界で住みよい都市ランキング」の世界2位になりました。大阪は世界基準の世界都市と評価されました。コロナ禍前には、大阪は訪日都市ランキングでも全国1位になっています。

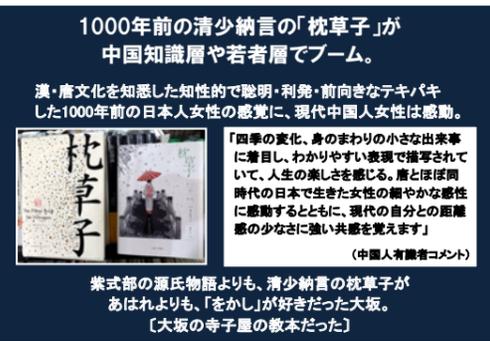
外国の人は大阪をどう見ているのかを在任外国人にお訊きしたところ、「smart」

と「manners」を感じるということに集約されました。smart だから洗練している。manner がいいから心地よのが外から見た大阪でした。この、大阪くらしの今昔館と私たちの研究所が共同で企画したワークショップで大阪の生活文化を体験をした中国人留学生たちの感想を紹介したい。

「違いもあるが、似ているところも沢山ある」と感じたとのこと。大阪の生活文化に触れ、違いを感じて驚くこと、母国の文化とが似ていることを発見し、嬉しくもあったということでした。似ていることと違っていること、この相反することの併存こそが、文化の本質ではないでしょうか。

コロナ禍前は、近畿圏への中国人観光客は多く、大阪・奈良・京都に「大唐」時代を感じるのだということでした。漢民族にとって最高の国は唐で、「奈良や大阪や京都の古いまちのたたずまいに、唐の長安が浮かぶ」ということでした。

千年前の日本の「枕草子」が中国知識層や若者層でブームになっています。漢・唐文化を知悉した知性的で聡明・利発・前向きなテキパキした千年前の日本人女性・清少納言の感覚に現代の中国人女



性が共感しているのです。

江戸時代の大坂でも、好みは紫式部「源氏物語」よりも清少納言「枕草子」だったようで、後者は大坂の寺子屋の教本になっていました。大坂の価値観は「あはれ」よりも「をかし」だったようです。

大坂はどのような都市なのか

日本最大の商業都市・大坂。大坂は混ざりあう都市です。「混」とは、水が流れて、丸くまとまっていく様で、この「混」が、都市をつくりだします。

また、大坂は宗教都市でもありました。江戸時代。北御堂と南御堂をつないだ道「御堂筋」が、現代大坂のメインストリート・メトロの路線名になっています。今に残る地名でも、天王寺、下寺町、大國町、寺田町、戒橋、天神橋、久宝寺、生玉寺町、龍造寺、太融寺、安堂寺、善源寺、神山、神崎、天神ノ森、神路などなど、こんな都市に私たちは生きています。

さらに、江戸時代は日本有数の観光都市だった大坂。観光地のベスト3は、四天王寺、大坂城、阿弥陀池(浄瑠璃見学)。道頓堀の芝居を見て、大坂料理を食べる。天満青物市場、大湊、呉服店、大店見学で「天下の台所」の活力を感じたようです。

大坂では、商家の床の間によく架けられていたのが森一鳳の「藻刈図」です。「もうかるいっぽう」とも言葉をかけていて、ここでも「をかし」が江戸時代の大坂人の感性を育てていたようです。

大坂の「本質」とはを再考する

大坂の本質とは何かというと、私は、「こうと(公道)」文化ではないかと思っています。「こうと」とは地味で質素ながら上

品。例えば天王寺七坂のたたずまい。「細雪」の舞台でもある、四姉妹の本家があったのは、台地の上の上本町でした。「のうれん(暖簾)」を大事にしていた大坂。古い暖簾は伝統と信用のある老舗、新しい暖簾は商売をはじめてから日が浅く信用が薄いことを示すものでした。あるいは、別家と分家の文化。別家は、丁稚から出世して番頭を務めた後に独立するもので、分家は庶子・兄弟が独立するもの。その間には、独特のつながりがありました。

大坂を象徴する話があります。大坂には「あやまり役」がいた。寺子屋で悪いことをした子を師匠が叱ろうとすると、別の子が現れる。師匠はこの「あやまり役」を叱るわけです。「あやまり役」はどれだけ叱られても、自分がしたことではないので傷つかない。だから師匠も、「言うべきこと」が言える。当の本人はそのやりとりを見て、反省するわけです。ただし、何度叱られてもなおらない子は、やがて破門されます。しかし事前に家・町に連絡がいき、町の長老が詫言を入れに行つて許されたといひます。このように、店や町全体で子どもを育てようとする仕組み、風土が大坂にはありました。

日本的なるものを 生みだしてきた大坂

大坂は、たくさんのモノ・コト・サービスを機能性(性能・価値)に文化力を掛け合わせてつくりだしています。

機能性×文化力
(精神性 × 洗練性 × 多様性)

大坂相撲もこの文化力で承継されてきました。

大坂には地域を守りつづけた地蔵さんの文化もあります。インドから来た地蔵菩薩に日本古来の道祖神が融合しました。町や村の守り神・子どもの守り神だった「地蔵信仰」が明治維新の廃仏毀釈による破壊の荒波を乗り越えて、やがて路地で復活して、地蔵盆が「再起動」しています。

明治維新と敗戦で、大坂は2度大きく沈みました。失われた日本経済の30年以上に、大坂・関西は沈んだわけです。それでも、そのなかで生きつづけているものがあります。地蔵さんしかり、大坂相撲もなくなったけれども、大坂春場所は今も大人気、連日の満員御礼です。

コロナ禍で変わった「場」と「時間」の構造

2020年、突然、コロナ禍となり、それからすべてが大きく変わりました。

コロナ禍で、「場」と「時間」の構造が変わりつつあります。オンライン革命によって、その人の「場」が変わると、その人の「時間」が変わり、人との関係が変わる。通勤時間が減って、「自分」時間が倍増しました。

そうして、ワークとライフが溶け合う。ワークがどう、ライフがどうではなく、これからは、「どう生きるか」がより重要となっていくでしょう。この「社会的価値観」の変化は、場の構造を変え、ライフスタイル・ビジネススタイルを変え、タイムラインを変えていきます。都市と地方・郊外、自宅と会社・学校・第三の場所という「場の関係」を変えることでしよう。

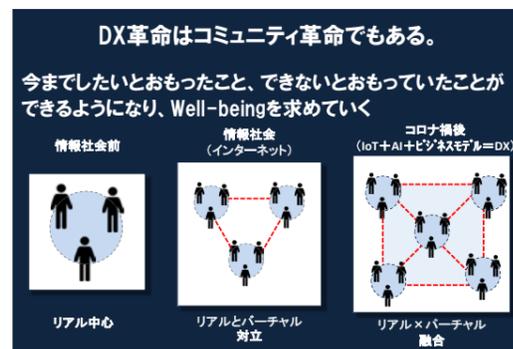
テレワークを契機としたコロナリセットを契機に、よりよく生きるため、都市・地域は変わりつづけます。街は寝るだけの

テレワークを契機としたコロナリセットを契機に よりよく生きるため、都市・地域は変わりつづける

街は寝るだけの場所から一日の大半を過ごす場所となる。よりよく生きるため、Well-beingを求め、家を中心に近所をふらっと歩き、ゆったりと心地いい気持ちがいい都市・地域が選ばれる。

場所から一日の大半を過ごす場所となります。よりよく生きるため、ウェルビーイング(Well-being)を求め、家を中心に近所をふらっと歩き、ゆったりと心地いい、気持ちがいい都市や地域が選ばれることとなります。

DX 革命はコミュニティ革命でもあり



<トピックス>

●地域のサブシステムとしての スポーツクラブと相撲

高松平藏 (ドイツ在住ジャーナリスト)
たかまつ・へいぞう

ドイツの都市エアランゲンを拠点にジャーナリストとして取材・執筆活動に勤む。当日は同地からリモートで参加。



ドイツのスポーツクラブとは

「村の相撲/ドイツの都市のスポーツクラブ」は、共同体のサブシステムとして動いているのではないかと。そういう視点からスポーツクラブを見てみます。サブシステムとは「地域運営でインフォーマルな形で影響を持つなんらかの体系」と定義しておきます。

まずは、ドイツのスポーツクラブとは何かを見ておきましょう。簡単に言うと組織としてはNPOのような法人

ですが、歴史的には19世紀からあるため、設立100年以上のクラブもざらにあります。ドイツ全国で約9万。例えば私が今住んでいる都市は人口11万人くらいですが、ここでも100程度のスポーツクラブがあります。そのメンバーは3万8千人くらいで、

人口の4割近い方がどこかのクラブでスポーツを楽しんでいます。また、人口2、3千人の村でもスポーツクラブが1つくらいは必ずあるんです。

地域のサブシステムとしてのスポーツクラブ

●高松平藏 (ドイツ在住ジャーナリスト)

①スポーツクラブとは?
・ NPOのような組織
・ ドイツ全国に約9万
・ スポーツを軸にしたコミュニティ

②メンバーは何をやっている?
・ 試合に出る
・ トレーニングそのものを楽しむ
・ おしゃべり
・ ボランティア

③地域にとって何?
・ 健康・スポーツのインフラ
・ 弱い/強い/横断的 つながりを生成
・ 市民の自主的活動のプラットフォーム

そのメンバーの属性はバラバラ

そのスポーツクラブの中で、メンバーはどんな人たちで、そこで何をやっているのか?ですが、日本だと、試合に出て勝つことや、新しい記録を目指すことに頑張ろう

ます。そんな小学校をみんなの学校にしたいとの思いから、大阪府大東市の旧深野北小学校に「大東倶楽部」が設立されました。この大東倶楽部の中心には「土俵」があります。地域の子ども・親・おじいさん・おばあさんをつなぎ、そこに住むことが楽しく、自慢になる。やはり本質は変わらないと言えそうです。



という人が多いと思います。部活などがその象徴でしょうか。それに対して、ドイツのスポーツクラブを見てみると、仲間と一緒に日々のトレーニングを楽しむことが

多い。競技によっては、それこそ10代の若者と年金生活の高齢者が一緒にスポーツを楽しんでいるという風景も見られます。もちろんチームスポーツの場合は、ある程度年齢が分けられていますが、基本的には属性がバラバラな地域の人のスポーツの場になっているんです。もうひとつ大切なのが、

日々のトレーニングはもちろんのこと、むしろその後のおしゃべりが楽しいということが多いようです。

また、トレーニングを共にする以外に、試合の審判として活躍する人とか、あるいはトレーナーとして活躍する人がいま

す。これは決してプロとしてやっているのではなく、トレーナーや審判の資格を持っている人が、自分の余暇にボランティアとして活動しているという形です。

他にも、スポーツクラブの運営に関連して、イベントの際に手伝いをする、あるいは写真撮影をするとか、広報活動をしたりとか、会計をやったりとかもあります。また試合中の怪我などの応急処置をする人が必要ですが、この資格を持っている方が試合中の医療スタッフとして加わることもあります。これらは有償のケースもありますが、いわゆる職能をいかしたボランティア、プロボノと言われる形でやっている人もいます。

地域にとって重要な意味もある

地域にとってこれは一体何なのかというのを考えると、健康やスポーツのインフラという言い方ができそうです。

特に今は、健康寿命をいかに伸ばすかというのがひとつの課題になっていますが、これに対応する役割があります。

メンバーは、属性がバラバラで、ただスポーツと一緒に楽しむという関係で集まって

いるわけですが、そこに顔を見知っているという関係ができたり、チームスポーツだともっと強いつながりができたりもします。あるいはスポーツクラブ同士のイベントがあったりしますから、横断的なつながりができてきたりもします。

それからもうひとつ、さまざまなボランティアができるので市民の自主的な活動のプラットフォームになるという言い方ができそうです。

企業は、こういうスポーツクラブに寄付をしていくこともあります。言い換えれば、地域にとっての健康スポーツインフラを企業の寄付によって強化しているという構図も見出せます。先程の飯田さんのお話でもありましたけれど、町で何らかの形でお金をプールしていくという動きと同じようなところを見出せると思います。

スポーツクラブへの貢献者を顕彰

そうしたことの意味や価値というものをみていくと、ボランティアをやっていくことで、そのクラブに大きく貢献している人が出てくるわけです。

そのような人をクラブが顕彰することがあります。その貢献度がさらに大きくとスポーツクラブの連盟自体が顕彰したり、自治体が顕彰するケースが出てきます。ボランティアとして頑張っている人にとってみると、これは一種の達成感やモチベーションの源泉となり、名誉が得られるわけです。

ドイツの社会は、基本的には市民社会。個人がベースで、「赤の他人」が互いに平等な関係にあります。先ほど擬制家族と

そのひとつが、ドイツの都市に必ずあるアーカイブです。ここでは千年ぐらい前から現代に至る文書や絵・写真などを集めて保存して整理しているわけです。

ドイツの都市は非常に歴史を重要視します。なぜかという自分たちの町のルーツ、町の物語はイコール町の歴史だからなんです。ボランティアで顕彰されることは、その歴史の中の一次史料として、こういう貢献者が町にいたことが記録されていくわけです。ある意味で、先ほどのお相撲さんの化粧まわしや墓の形で残っていたりすることに相当するんじゃないかなとも思います。

スポーツクラブは社会の課題を共有する場

スポーツクラブのメンバーは、その属性がバラバラだという話をしましたが、メンバー自身が地方の議員さんだったり、あるいは企業経営者だったり、他の団体役員さんだったりすることがあります。また、そういう人同士の交流もありますし、役職が重複しているケースも見られます。

するとどういうことが起こるか。社会的課題などが割とスムーズに共有されていると思われま

す。ちなみにドイツの地方議員というのは、実はボランティアです。基本的には無償で、自分の仕事、自分の職を持っていて余暇の時間を使って議員活動をしています。

ひるがえって「都市」というのは、何らかのかたちで政治決定の積み重ねという一面がある。例えばどこかに道路をつくらうとかスポーツの場所をつくる時に予算を組むわけです。そこには当然政治的議論が必要です。けれども、スポーツクラブなどを通じて、社会問題や課題というのがすでに共有され、政治的決定の議論と比較的連続性があるんじゃないかと思われま

す。ドイツの都市というのは、赤の他人の集まりで平等な人間関係が基本です。そういう関係があった上でデモクラシーと

いうものが都市運営を展開する上で非常に大切な様式として動いています。つまり、スポーツクラブというのはインフォーマルな議論で公論を生成したり、実践を展開したりするような役割も持っているように私は思います。

血縁・地縁コミュニティのサブシステム

それに対して、今日の相撲の話などに着目すると、擬制血縁あるいは地縁でできた濃密な人間関係があったというふうに見られるわけですが、私が関心を持ったのは、夜相撲があったときに強い力士が八百長を申し込まれることがあった点。いわゆる体面を保つとか村の顔を守るとするのが目的です。これは民主主義でできたコミュニティではないけれども、地縁血縁に基づいた人間関係の秩序があって、それを守ろうとしていると私は理解しました。



「衰退」と「再建」をつなぐのは、「本質」か

弘本 ここからは、トークセッションに移らせていただきます。まず、視聴されている方からの、チャットでいただいているご意見やご質問を紹介します。

ひとつめは、飯田さんのお話で、仲仕とその集団の関係をうかがっていると、沖仲仕から出たいわゆるアウトロー集団との近似性が強く感じられるが、これはうがった見方でしょうか、というものです。

もうひとつ別の方からのご感想とご質

問です。大変興味深い内容で、あっという間に時間が経ちました。飯田様からは「共同体の再建」とありました。一方で別所様からは「村社会の衰退」とありました。矛盾のようにも聞こえるわけですが、このあたりをつなげるのが池永様の「本質」なんでしょうか。そうであればその本質は何でしょうか、というものです。また、4名それぞれの方のお話を聞かれて、相互にご質問したいところがありましたらお願いいたします。

都市化と都市社会化の間で、サブシステムとしても機能

ドイツの議論で「都市化」というのは

人口増加など量的な捉え方です。つまり擬制血縁や地縁ではなく、赤の他人の集まりになるということなんです。だからいろんな人が出会う機会を意図的につくっていくことが課題になるわけですが、文化政策などがその役割を果たしています。加えて言えば、NPO やスポーツクラブもそうです。地縁・血縁とは無関係で、同じ目的や志向を持った人が知り合う場になる。これによって、都市が単なる赤の他人の集まりではなく、社会的有機体のようになっています。「都市社会化」という質的な変化につながるわけですね。その上で、先ほどの検討を鑑みると、スポーツクラブを都市のサブシステムとして捉えることができる。

ムラには相撲、都市にはスポーツクラブ。構造や概念は異なりますが、共同体にサブシステムの存在が見い出せ、また必要不可欠ということなのでしょう。

地域のサブシステムとしてのスポーツクラブ

●高松平蔵 (ドイツ在住ジャーナリスト)

① 顕彰

される人 ▶▶ 達成感、名誉、モチベーション
する側 ▶▶ 貢献者の認定、記録

② 影響力のある人物の交流と重複

- ・政治家、経営者、団体役員らの交流や役職の重複が見られる
- ・問題や課題の共有
- ・政治的議論との連続性

いう話もありましたが、そういう地縁や血縁とは違う関係のもとに構成されています。

では平等というのは何なのかという、私は「誰でもアクセスできること」という意味だと思います。さらに踏み込むと、その公共の空間の中で誰でも手を上げて何かしたいとイニシアチブをとってもよいという意味でもあります。それをドイツの場合ではボランティアという形で進めていくわけです。だから平等であるが故に社会的な問題を感じたり、何かをやらうという人は誰でも手を挙げてやっていて、それに対して顕彰するシステムが動いていると理解できるわけです。

顕彰する側のほうを見てみると、貢献している人を認定するという機能とそれを記録していくという機能があります。

はご理解いただきたいと思います。また、相撲集団が公的な社会に位置づけられていたということ、共同体の再建ということについては、別所さんがおっしゃっていることと僕が言いたいことは、まったく矛盾がないと僕の中では理解しています。近代化の過程というのは共同体がどんどん変わっていく過程であって、その一連の変化の中で村相撲が解体されていくというふうには僕は考えています。一方、共同体をどういうふうにも再建するべきかという方法については、これから皆さん方のご意見を聞きながらみんなで考えていく必要があると思います。

そこで鍵になるのは、やはり共有財産というものではないか。土地や建物だけでなく、どういうものをみんなで共有していくのかが大きな課題です。高松さんのお話にあったアーカイブの話、公文書という歴史的な資料なども、どこまでみんなで共有していくかということも含めて、考えていく必要があるでしょう。

飯田 それではチャットのご質問から。相撲集団を現在のアウトロー集団と近似的な集団だというふうには捉えることは、決してうがった見方ではありません。ただその形成段階では、江戸時代のアウトローというのは文字通りではなくて、半分は公的な社会に位置付けられている存在でした。その意味では、今の反社会的な集団とはかなり違いがあるということ

大きく異なるドイツと日本の人間の関係性

別所 私からは、高松さんのお話に関連しての質問です。以前、私の子どもは地域のスポーツ少年団に入っていたんです。よくある話ですが、そこでは、子どもたちの送り迎えをするのに車を出すとか、母親の場合も子どもたちのお茶当番などがありました。村社会じゃないですけども、それをおろそかにすると周りの親から白い目で見られることがありそうな感じ。一方で、いろんな属性の人が参加しているドイツのスポーツクラブの中で、子どもに対するお世話などはどういう役割分担になっているのかが気になりますが、どうでしょうか。

高松 そのあたりのことは人間の関係性なので、ドイツでもはっきり表には出てこないところもあります。結局は程度の比較になるのですが、基本的にドイツのスポーツクラブはみんなの場所であり、お互いは平等な関係なので、誰でもが何かを提案したりイニシアチブをとってもいいというのが原則としてあるんです。ですから、子どもの世話などについても、大抵は親の誰かが、私が世話係をしますと言って手を挙げる人が多いので、問題があまり起こりにくいという印象を持っています。結果的にカジュアルに頼めるし、難しければカジュアルに断ることができる。

学校関係でも、PTAは日本だと持ち回りで押しつけられるという感じがあると思うんです。ドイツでもPTAに相当するものがありますが、私が知ってる限りでは、問題意識があるとか積極的に参加したいという人が手を挙げるケースが多くて、日独の違いとして映ります。

今、共同体の解体、近代化によって地域が解体されていったというお話がありました。ドイツの社会を見ていると、個人をベースにした近代化というのはヨーロッパの方が元祖ですが、個々人の自由の最大化を追求します。しかし、それは同時にということで、ほかの個人とどういう関係性を築いていくのか常に重要な問いでした。

言い換えると、個々人はバラバラなのですが、どうやって社会の一体感や助け

合いの機運をつくっていくのかという時に、ドイツの場合では「連帯」という概念が働いているのだらうと思います。

「連帯」の考え方は、例えば「車椅子で移動したいところへ行けなくて困っている人」を、赤の他人が自己決定で助けると、車椅子の人の自由が実現します。これで全ての個人の自由を最大化する。言い方を変えると個人主義の団結原理と理解できます。そしてこれは社会保障の原理です。日本だとこのあたりの議論の積み重ねがちよっとちぐはぐになっていて、そのために「コモン」など、政策原理なんかにはちよっとつなげにくいような、広い概念の議論が出てくるのかなと感じています。



共有財産の形成と維持のモチベーションは何か

弘本 引き続き、高松さんからは、何かご質問はありますか。

高松 飯田さんが、町と町屋敷っておっしゃっていたのですが、その屋敷を持つ町人がどういうモチベーションでいたのかなというのをお尋ねしたいと思いました。

飯田 そこは、一言で言うのはちょっと難しいところがあります。ただ、そのあり方は共同体を前提にした所有なんです。所有に基づいて富を蓄積していた場合、理屈上は自分だけのものにしてはならないという意識がたぶん働くんだと思います。

共同体をもっと拡大解釈すると、社会全体に還元しなきゃいけないっていうように町人たちの意識が働いた結果として、勧進をしたり合力に応じたりしているという理屈なんじゃないかなって、僕は頭の中で理解しています。史料的に実証できているわけじゃないんですけども、そういうモチベーションとか理屈でやっているというように理解できそうです。

高松 近江商人の「三方良し」という話があると思うんですけど、そういう概念との関連性はどうでしょう。

飯田 そうですね。経営理念っていうところでは、底辺でつながっている部分があるんじゃないかという気はします。

高松 古い商家の話で言うと、昭和の初期ぐらいの例だと思うんですけど、儲けたお金を一旦神棚に供えていたというような話を聞いたことがあります。その商人は地元へ寄付をいっぱいしていたんですけど、私の理解で言うと、神棚に上げることによって、私利ではなく、より高い視点からのお金であるということを確認する儀式のように感じられたりもしました。自分のためだけに使うのではなくて、世間のためにも使わなきゃいけないお金であるんだよっていう意思の表現のように思えたことがあります。

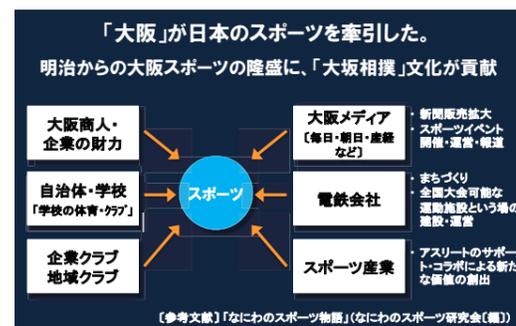
飯田 確かにそうですね。そういうものは、ひとつの人間のやり方というか、私よりも公の方に軸足をずらすというか、世間のためにの方に重きを置いた、そういう人のあり方を紹介された事例かなと思います。

コロナ禍でのリアルとバーチャルの融合

弘本 池永さんからは、どうですか。

池永 今、時代の大きな流れとして、コロナ禍の中で、都市に集中していたものが郊外に移り、都市と郊外と地方がネットワークでつながってこうとしています。都心でありつつ郊外である、そして地方である、それが一体化するという時代に向かっているのではないのでしょうか。オンライン化、DXというAIやIOTというようなものを含めて、従来のリアル中心だった世界が、インターネット時代の中でリアルとバーチャルの併存が、コロナ禍でバーチャルを使いながら、リアルと融合する時代になりつつあります。そうなるより「場」の重要性が高まっていくと私は思っています。

また、スポーツと大阪の話を考えて、なにわのスポーツ研究会の『なにわのスポーツ物語』という本によれば、江戸時代から明治に入り、大阪のスポーツは日本を牽引して、大阪発のスポーツ大会がたくさん生まれたそうです。そこには大阪相撲の文化が貢献しているのではないかと思います。



関連図を書くとき真ん中にスポーツがあり、タニマチも含めて大阪商人とか大阪の企業が支える。自治体とか学校教育の体育とかクラブ活動があって、企業や地域のクラブもある。大阪のメディア、毎日とか朝日とか産経とか新聞社のスポーツイベント開催や報道があり、そして電鉄会社のまちづくりの一環として全国大会が可能な、例えば甲子園や花園などの運動施設を建設・運営し、支える。大阪発のスポーツ産業はミズノやデサントなど、たくさんあるんですが、アスリート、スポーツ市場・地域における価値を生みだし発展させてきたと思います。

ただ、ここ30年間、それがうまく回らなくなっていたのではないのでしょうか。コロナ禍の今、コロナ禍で動きだしたオンラインを使いつつリアルとバーチャルを組み合わせさせて新たなスポーツモデルを創造していくことを目標に動きだしていくべきです。

それは新しいことをつくるとのことだけでなく、先ほどの江戸時代の大阪文化、スポーツ、大阪相撲の流れも含めた歴史が活かしていけるのではないかと。その面では江戸時代や明治以降の大阪がしてきた本質を核に組み合わせることが重要で、DXなど新たな技術を掛けあわせて新しい価値を創造していくことが大切になっていくのではないのでしょうか。

一見矛盾しているものをつなぎ直していく

弘本 今日は相撲を切り口にしながら、これからの社会機能にも注目しながら議論しているわけですけども、とりわけ先程の都市と農村の話もそうですし、その衰退と都市のコミュニティ再生という話と、一見矛盾しているようなものをつなぎ直していくという話であったり、あるいは移動と定住のあり方も考え直してい

く時代に入っているのだと感じています。

相撲の話聞いていて、非常に興味深いと思ったのは、農耕社会という定住性の高い社会のなかに村相撲というものが形成されていて、一方で都市の非常に流動性の高いところにも渡世(プロ)の相撲集団というものが形成され、大相撲ができていったという事実です。しかも、それは相互に関係しあってということでした。

定住社会にとっても流動社会にとっても重要な要素というものを両者がある部分で相互に融通しあっていたというか、そういう関係でもあったような感じがしています。別所さんがおっしゃったように、あまりにタイトな共同性は誰もついていけなくなってしまうというようなことも一方であり、そこをほぐしていく仕組みのなかに、高松さんがドイツから投げかけてくださっているような視点があるのではと思います。



コミュニティ再生の鍵はどこにあるのか

弘本 チャットの方からも、町会での活動をどうしたら活性化できますか?というご質問が来ています。

コミュニティの再生やその必要性はみんなが言うのですが、一方で、とてもじゃないけど、そう簡単にはできないという状況もあります。それを可能にしていくには何をどうすればよいのか。今日の議論で出てきましたある種相反する位相の中に、その可能性があるのではないかと、むしろそこをつないでいくことで可能性が見出せるのかなとも思っています。そのあたりにつきましてお話をいただければと思います。**飯田** 繰り返しになりますけど、やっぱり共有財産ですね。かつて町は共有財産をもってたんです。住民の共同体ということで、会所屋敷を共有したし、あるいは文書なども共有しました。町運営に関するいろんな文書を共有し、長い期間伝来

させてきたなかで、そういう財産が積み上げられてきました。それを今後は、どういうふう蓄積して形成していくのか、という範囲でどういう人を対象にしているのかなどが、やはり重要な課題になると考えています。

別所 私は、飯田さんが発表の最後に語られた相互扶助の精神がやはり大切なことだと思います。共同体レベルでなくても、人間関係の中で相互扶助の精神というのがどれだけ発揮されるのかということ。これからも、いろいろな問題はそこに集約されてくるんじゃないかと思っています。

最近の商習慣においても、例えば丁稚奉公を10年した後に顧客をつけて独立させるというようなシステムは完全に崩壊しました。そういうのをただ復活したいわけじゃないですけど、それに代わるような何か新しい形が生まれてくればと思います。

弘本 家族の問題も近代家族が行き詰っているのが現実で、近代家族に依拠していた社会システムが、すでにもたなくなっているという社会状況のなかで、今日的に擬制血縁などにも見直される部分があるように思われます。一旦潰れたんだけどそれを新しい形で再生していくこと、再構築が必要になってきているというのは、たぶん多くの人が実感していることだろうと思います。

コロナ禍を越えていくために

池永 再構築ということでは、コロナ禍はまさにDX革命、オンライン革命を促し、家と会社と第3の場所という、場所と時間の関係性を激変させつつあります。

働くという面では、通勤だと会社のなかで仕事をするという時間や場所から解放され、会社という形も解体と再生に向かっているように思っています。暮らすという観点では、住まいで仕事をするというライフスタイルが出てきており、親子とか家族の関係性の再構築に向かっていると思います。学ぶという観点でも、新たな学びのスタイルを求めて学校の解体と再生に向かっていると思います。

よりよく生きることを求めて、いつでもどこでも学べて遊べて働けて、よりよく生きる時空間の実現に向けて、オンラインで

もあるリアルでもあるというなかでつながっていきます。働くから学ぶまでを総合的に含めた形で、新たなコミュニティ、新たなつながりが求められていきます。

それらは一気にできるのではなくて、過去に学びながら新しい技術を生かしながら、コロナ禍で再発見した社会的価値観を大事にしていこうとしていきます。なによりも、家、地元、地域が重要という時代となります。

高松 私も飯田さんと同じように、公共性、みんなで所有する、みんなのものとして考えるという部分が、これからの社会の質そのものになってくると思います。

この時、歴史をも共有財産として、どうやっていくのかは大変重要な課題になっています。それから、より大切なのは、この公共の部分をどう形成していくのか。ヨーロッパ的な考え方ではあるのですが、やはり個人が他の個人とどういう関係をつくっていくのかということに尽きるところです。

私は、そのためには2つしなければいけないことがあると思います。

ひとつは池永さんもおっしゃっていたように、今からの学びの機会をどうつくっていくのかということ。変な言い方ですけども、コロナ禍で今日のように場所に関係なく、知的刺激を受けることができる機会が持てる、これはひとつの展開だと思うんです。

もうひとつが、どういうふうに関係の意見を表明して他者の意見を聞きながら発展させていくのかという一連の対話の能力の育成です。ドイツの教育では、そういうことを小学生の頃からひとつの対話法として鍛えているところもあります。すぐには難しいとしても、日本でもこうした対話の様式を構築していくことが必要ではないかと思っています。

一人ひとりが改めて 自分の生活を見直していく

弘本 もっとたくさんお話ししたい気持ちは山々なのですが、この議論は今日で終わるものではなく、機会をとらえながら今後も続けていければと、思っています。

最後におひとりずつ、メッセージをいただけたらと思います。

飯田 やっぱ、個人一人ひとりの生活

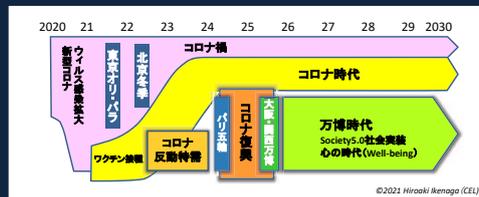
のあり方を見直していくというのが重要に思われます。労働のあり方もそうだし、生活のあり方についてもそう。それぞれが一人ひとりとして考える、そこがまず基本になるのかなと思います。

別所 まとめではないのですが、社会が行き詰まると次から次に新しい言葉が出てきて、それですませてしまう感じがあります。それが横文字であったりするんですが、そういうことをただ繰り返しているような気がします。SGDsなんて言いますが、ただ言葉で口にするだけでは、それで社会がうまく回っていくのかというと、そうじゃないのではないかと。むしろ、属性や立場の異なる人々が、今日のフォーラムのようにまったく違う視点から意見を交わし、発想していった方がよほど意義深いのではないかという気がしています。

「心の時代」につなげるために

池永 コロナ禍は、世界パンデミックで大きな影響を与えていますが、私はある意味でチャンスではないかと考えています。

2020年代はコロナ禍の社会的影響が続くコロナ時代



2022年までに疫病としてのコロナ禍は収束するが、2020年代はコロナ禍の社会的影響がつづくコロナ時代となる。コロナ禍の世界的収束に伴ない2024~25年のコロナ復興のあと、2025年の大阪・関西万博を契機に万博提案プログラムを社会実装して、日本を再起動できるかが鍵。

コロナ禍の社会的影響は2020年代は続くと思っています。ワクチン接種も含めて疫病的な収束は見えていきますが、コロナ禍による社会影響はまだまだ続いていく。2024、25年あたりで、コロナ復興があり、大阪・関西万博が2025年にあるわけですが、2020年代後半に、我々は会社や家や学校も含めた都市・地域のつながりを再構築して、ウェルビーイングを求めていく「心の時代」に持っていきけるかが問われています。

高松 18世紀にヨーロッパで、読書クラブが流行った時代があったんです。当時は、本は高価なので、1冊の本をみんなで読んで議論をする。職業などを超えた集まりです。平等な関係に基づいた市民社会形成の礎のひとつになったとも言われ

ています。

今日のように、コロナ禍によって、対面では会えなくとも、オンラインでいろんなことを場所を超えて学び合うような機会が実現しやすくなってきました。こういうのはやはり続けていくべきでしょう。今日の話で定義された問題であるとか課題であるとかにつきまして、やはり持続して話をしてお互いに刺激を提供していくことを続けていきたいですね。

スポーツを地域のものにする ためには

弘本 最後にもうひとつチャットで質問が入ってきました。

ヨーロッパで学校の体育教育ではフィジカルのみを行い、競技スポーツなどは各競技クラブが主になっていますが、日本もやはり地域で各競技クラブを育てていくほうが良いように思いますがどうでしょうか。

高松 これは意外に難しい問題だと思います。原則論で言えば地域のスポーツを地域のものにするっていうのは、一旦その地域の中のスポーツ資源、すなわち施設であったり、指導者などの「ヒト」、資金がどのぐらいあるのか確認して、それを編み上げるような作業が必要で、それが地域化ということだと思います。日本には、既存のスポーツ関係団体だとか部活だとか、すでに存在するものがあるので、そこをどういうふうにしてひとつの地域資源として考え

て柔軟に編み上げていくか、ここは結構な力仕事になると思いますね。原則論としてはそういう方向性だと思います。

弘本 今日は開始時に配信トラブルがあり、時間が押したうえに、音声の乱れなどもあって大変申し訳なかったのですが、今回のこの「ダイアローグ ナイト」は、相撲文化を支えていた社会システムに目を向けてみることで、今後の地域・社会のあり方を考えていく、そのための視野を開いていく、恰好の入り口になったのではと感じているところです。

本日は、みなさま、ありがとうございました。

